

# あさととしえ 安里要江さん

1920(大正9)年12月10日生まれ

民間人

戦地 屋宜原、北中城村喜舎場、  
首里、那覇、真栄平(現糸満市)、  
真壁、伊敷



## ●本当に戦争が来るとは感じていなかった

1944年8月22日、お兄さんの子ども(私の甥)は、乗っていた疎開船・対馬丸が沈んで、亡くなっていました。

1945年、正月を迎え「九州に疎開しなさい」などと、いろいろありましたが、私達の家では応じることが出来なかった。対馬丸に乗っていて亡くなった甥は、国民学校の4年生でした。この子を亡くしていたので、船に乗って行く勇気がなかった。命の保証がないから行くことが出来ないということで、主人の実家く屋宜原(やぎはら、現八重瀬町)におりました。本当に戦争が来るとは感じてなかったです。まさかということです。

1945年3月23日、「空襲警報発令！」と同時にババンバンバン、ババンバンバンと砲弾の音が聞こえて来た。防空壕に避難したらもう、家に帰れません。以前那覇の家に投宿していた村上准尉が、我々の防空壕に訪ねてきました。「米軍は港川から上陸して来ると言われている。ここにおつたらまずいでしょう。危ないから私たちが送ってあげますので、北の方へ移動してください」。3月25日、小型の軍用トラックに乗せられて夜道を行いました。

喜舎場(北中城村 地図2)まで、およそ25キロありました。自分の実家の所に降ろしてもらい、実家の墓の中に移動しました。私たちは「ああ、よかった。墓の中に入れて大丈夫だ」というような安心感に、ほんのわずか浸りました。けど翌日から爆弾が周辺に落ち、爆風が勢いよくバーンと入って、子供たちが怖い、耳が痛いと言っています。

## ●1945(昭和20)年4月1日 アメリカ軍が4キロの距離の北谷(ちゃたん)から上陸して来た

山から下りて家で炊き出しをしてました。姉さんと私の母が、アメリカが北谷まで来たから、1時間か2時間で来ると思ったんでしょう。「さあ、逃げよう。逃げよう。」と言って、何も食べないまま、子どもたちを連れて出ました。私は娘のカズ子ちゃん(7か月半)をおんぶして、右手には長男の宣秀(4歳半)の手を引き、父と母は年寄りだから杖をついて逃げたわけです。13人がゾロゾロゾロ歩いて、夜道を逃げました。これからは誰も助けてくれません。

首里まで12キロ歩きました。どこに逃げて良いか分かりません。首里には、たくさん人間が集まっているわけです。どこに行くか分からない。右往左往している時、一人のおばさんが、西の森の壕を(地図3)教えてくれた。

このガマの入り口で私たちに情報提供したのは私の弟です。「師範学校の勤皇隊、千早隊の安里です。情報班です。」と挨拶をして、「私たちは、皆さんに情報の提供に参りました。私たちは敵の上陸をゆるしてしまいました。でも、4月29日(昭和天皇誕生日)、絶対に取り返すことにします。4月29日までは体に用心して生き続けるように子どもたちを守ってください。」という言葉だったんです。弟の声に似ていると声をかけて、抱き合って泣いたんですね。

砲弾の音が近づいてきて「那覇へ行こう。那覇は様子が分かるから。防空壕も探せる」と言って那覇(地図4)へ行きました。4月9日ここに来て、約3週間滞在して居りました。祖母が持って居た食料はあんまりないけれども、あちらこちらの廃屋から、壊れた家から、放り投げて皆逃げてしまった家などがいっぱいありますから、もう泥棒とは言えないでしょう、と。食料も無いから、ここから逃げようと、また、決断しました。

## ●あてのないまま南へ逃げる

4月末に、再び屋宜原に戻ったことになります(地図5)。行かなければよかったのにと、ここに来て後悔しました。

これからは、絶対逃げないと思っていたら、間違いでした。隣りの人たちが、みな話し合いをしまして、「ここから逃げて行くから、私たち行きますよ」という挨拶が聞こえたので、みんなが逃げる所へ逃げなくてはいけないと思って。6月1日に、敵が首里をダメにして皆逃げて来るという情報で、アメリカ兵も日本兵もここに来るから、彼らが来ないうちに逃げようと言って、予測もしないのによ、夕べまで何の話もしないのによ、周囲の情報で私達は逃げた。

6月6日、真栄平まで来ました(現糸満市、地図6)。大変です。何も食べていません。あちらこちら知り合いを訪ねて「助けて下さい」と行きましたけれど、助けるどころではない。みんな逃げ惑っているんだから。

路上にあふれている避難民、死者、負傷者、呼び合っている家族、親、子ども、子どもが親をさがしている。そのような状況の中で我々家族がバラバラにならないように、村の中の防空壕をたよりに入って行こうとしました。でも私達を入れてくれる防空壕なんてありませんでした。みんな自分たちの家族が入っていて、他の人たちは、一人もそこに避難できるような余裕はないのです。